

CENTER NEWS 2009. NO.276 **8**



協同組合 関西地盤環境研究センター

表紙説明

兵庫運河に架かる和田旋回橋（明治33年建設、橋長：15.5m、最大支間長：7.7m）の写真です。

本橋は、鉄道の旋回橋としては我が国最初の橋です。

和田旋回橋は、JR和田岬線の鉄橋で、下を流れる兵庫運河の船の航行時に旋回するようになっていましたが、現在は、橋・線路も固定されており旋回することはないようです。

撮影：川崎地質株式会社 藤元 学

目次

理事就任の挨拶	本田 周二	1
6月定例理事会		4
6月主な会議・会合・行事		5
6月受注・完了(月別・推移)計画対比グラフ		6
組合員技術者紹介コーナー(第63回)	中野 英樹	7
守口移転物語 第8回 C棟完成		10
試験立会・見学会報告		12
国土交通省近畿地方整備局 来所記録		13
第2回ケータイフォトコンテスト作品募集		14
編集後記		15



理事就任の挨拶

協同組合 関西地盤環境研究センター
副理事長 本田 周二

このたび、5月の総会で副理事長を拝命いたしました(株)日建設計シビルの本田と申します。高村理事長より、活気あるセンターをめざして組合員の方々がより集う場を図るよう仰せついております。何卒宜しくお願い申し上げます。

昨今の社会環境や経済情勢から長らく続く閉塞感が払拭できない中、センターニュースの編集委員会あるいは理事の方々との会話で、よく耳にする言葉が“業界の将来を担う若者の育成”です。これはもちろん重要かつ喫緊の課題ではありますが、私は現在の閉塞感を打開するキーパーソンは“ベテラン”ではないかと思ひ始めています。このように考える理由を綴ってみます。

随分と昔のセンターニュースに次のようなコメントが掲載されていました。『昔、隠居した長老がいて重大な場面では大権を発していた。これは経験というものは積み重ねるに従い深みを増し、長老の判断に誤りはほとんど無くなるということの意味していた。しかし、現在の企業は分業化が進み、全体を観るトレーニングがなくなっている。いくら年数を重ねても、全体を観て判断する蓄積が無いので“長老”が育たない。年だけとって以前のように体が動かなくなっても、それを補う全体を観る目が育っていない。従って中高年は不要という図式ができあがる』という内容でした。

また、これも以前に何かでみかけたものですが、『変化の時代、それはプロがアマチュアに負けること、あるいはベテランが新人に後れを取ることが往々にして起こり得る時代である。ベテランが後れを取る素因の一つが、無意識のうちに現状維持思考に陥り、過去の経験のみに固執して勤勉な怠惰を営む。これが会社を危うくする、閉塞感を助長する。変化の時代にベテランが具備すべき条件は、過去の成功体験のみに頼らない、時にはこれを否定することの出来る“知的度胸”を身につけることである。織田信長の偉いところは、少数で大勝利し、世の中に出た桶狭間の合戦以後、彼は少人数による奇襲戦法はただの一度もやっていない』。

私は、ベテランが元気になり、勤勉な怠惰から早く足を洗わない限り若者も易きに流れ、この泥沼のような閉塞感から抜け出せないように思います。更にもう一つ、最近言

われている『技術が伝承されない』という問題についてもベテランの果たす役割は大きいはずですが、いささか観点を变える必要が有ると思います。

今年の初めに仕事でベトナムに行きました。ホーチミン市のある研究所長に会いました。会う前に現地の方からホーチミンの偉大さについて聞かされていました。ベトナム戦争当時、ホーチミンは将来性を感じた若者は戦争に駆り立てず、キューバや東欧諸国に多勢を留学させたそうです。私が大阪の万博に浮かれていたとき、彼らは家族や友達が戦争で亡くなっていく中、後ろ髪を引かれる思いで異国の地に旅立ったわけです。そのような方々が、今のベトナムの国造りにおいて主要なポストで活躍されているのです。私がお会いした方もその一人です。穏やかな方でしたが、私の印象は『肩に背負っているものの重さが根本的に違うな、私などが対等に立ち振る舞うことなどできようはずがない』というものでした。しかし、思い起こせば我が国も先の大戦後、国造りを担った私の親父の世代は、同じような重荷を背負っていたように思います。彼らは手取り足取りで技術を教え、伝えたわけではありません。伝えたものは“こころざし・志”以外の何ものでもなかったのではないのでしょうか。世代とともに伝えるべき志が薄れ、忘れ去られて今におよんでいるということが技術伝承不足の実態ではないのでしょうか。

協同組合であるセンターの強みは、自社の枠を離れ多種多彩な技能や特技・趣味を持った多くの方々と心安く集える場であるということです。その場には全体を観る目の養い方、知的度胸の身につけ方、さらには志を如何に具象化し、自分自身に昇華していくかを気づかせてくれる何かが有ります。これを組合員への支援サービスに取り込むことを模索していくつもりです。皆様のお力添えをいただき奮闘していく所存です。重ねまして宜しくお願い申し上げます。



組合員技術者紹介コーナー（第 63 回）



所 属：株式会社エイト日本技術開発

氏 名：中野 英樹

生年月日：1971 年 6 月 16 日

出身地：兵庫県

（株）エイト日本技術開発の中野と申します。弊社は 2009 年 6 月 1 日より、（株）エイトコンサルタントおよび日本技術開発（株）の建設コンサルタント事業を統合し、新しく（株）エイト日本技術開発としてスタートしました。まだ、統合ほやほやとあって、慣れない職場環境にありますが、そんなこと言ってもらえないほど社会情勢が厳しい！ので、みんながんばっています。

また、私は関西地盤環境研究センターの支援サービス小委員会の委員としても活動しています。支援サービス小委員会では数々の支援サービスを予定しておりますので、どしどしご活用してください。（関西地盤環境研究センターの H.P にて「支援サービス」をクリック！）

以下に簡単ですが、私の自己紹介、雑談などを書かせていただきます。

【自己紹介】

高校までは、神戸市兵庫区の湊川隧道の呑口側に生息してました。湊川隧道とは、標高 85m の会下山をくり抜く、わが国最初の近代河川トンネルです。しかし、平成 12 年に新湊川トンネルが完成したことに伴い、河川トンネルとしての役目を終えましたが、構築後 100 年になる湊川隧道は当時の高度な土木技術で造られた貴重な土木遺産として、今でも残っています。保存活動も活発で、一般公開、コンサートなども行われているようで、生息していた頃はそんな貴重な土木構造物とは知りませんでした・・・。

中学時代から地学系が好きだったこと（ニュートンという雑誌を良く読んだ（見た？）記憶あり）、高校時代は山岳部で自然と向き合うのが好きだったことが縁で、地質学科がある大学に入り、構造地質学を専攻しました。大学が自然豊かな地域（島根県松江市）にあったこともあり、かっこよく言えばアウトドアな生活、ふつうに言えば釣りして七輪で焼いてお酒と一緒に友人と食す生活、友人と囲んでわいわいする生活を堪能しました。

私は弊社に入社してから、はやいもので 13 年目に突入してまして、現在は主に斜面防災、地質調査・解析に携わっております。

趣味はいまのところありません。子供が小学生になってどんどん親離れしており、そろそろ趣味を持とうかと思案中です。ただ、2 年前から小さな貸農園を借りて野菜を栽培してまして、耕す・育てる・食すに家族でハマってます。

【小さな幸せ】

2年前から貸農園にて年中、野菜栽培をしています。20m²のほんの小さな My 農園ですが、家族が嗜むには十分な量の収穫があります。

貸農園といっても借りた当時(2年前)は更地で、くわで10cmも掘れば、大阪層群の粘土、砂層が分布・・・これで野菜ができるの?と不安に感じましたが、アメリカ西部開拓のフロンティア精神に通じるものがあると勝手に思いこみ、一人で畑全体を50~80cm程度起こし、肥料を施し、1回目の植え付けにこぎ着けました。でも不安が・・・周りにある昔からの貸農園は土も肥沃でフカフカしているが、My 農園の土は白っぽく、土が乾くと表面がバリバリに・・・この土に挑む野菜たちは、大根、カブ、青梗菜、小松菜、白菜等。「がんばってくれ!」と願いながら、私も妻も超初心者だったので、栽培ブック片手に悪戦苦闘の日々となりました。

栽培は秋から始めたのですが、虫被害続出!青虫、芯食い虫、夜盗虫などなど。毎日ピソセットを持って新芽付近に陣取る芯食い虫を退治し、夜になると出没する食欲旺盛な夜盗虫を懐中電灯片手に退治したり・・・。殺虫剤を使えばいいのにとのご意見もありましたが、できるだけ無農薬で作りたいかったので、意地で虫取りしました。

その成果、野菜たちもがんばってくれて無事収穫!白菜は植えた時期が遅かったため駄目でしたが、それ以外は概ね成功しました。こまめに追肥、手入れしたことが功を奏したようです。自分で作った野菜は格別にうまいもので、食す時は「小さな幸せ」を得ます。

それから、夏野菜2回(ただいま2回目奮闘中)、冬野菜2回育ててきました。まだまだ、超がとれたぐらいの初心者ですが、今後も野菜作りを楽しみたいと思っています。これが趣味に発展してもいいのかもしれない。

最後に。野菜もちゃんと手入れすれば、それだけの収穫があり、正直な生き物です。これは仕事においても同様だと感じます。ある意味、仕事も目に見えない「生き物」といえるのではないのでしょうか?

とめどもない自己紹介、雑談となりましたが、ご了承のほど・・・。

次回の執筆者には、会社の後輩である諏訪陽子さんを紹介させていただきます。諏訪さんは女性には過酷な条件がつきまとう現場管理や現地観測もこなしてきており、ただいま経験値アップ中です。

よろしくお願い致します。

守口移転物語 第8回

C棟完成(竣工記念式・各試験室・事務課のご案内)

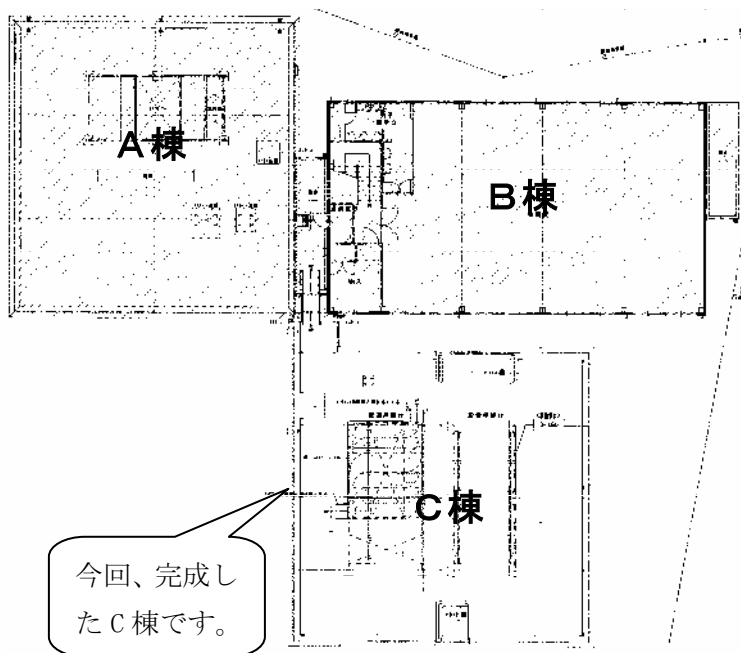


写真-1 は去る5月26日、竣工式に出席された組合員の方々とセンター職員の記念撮影です。

7月23日、A、B、C棟の外壁工事が終了し、その姿を表しました。

図-1 センターの平面位置図



写真-1 平成21年5月26日 竣工式後の記念撮影

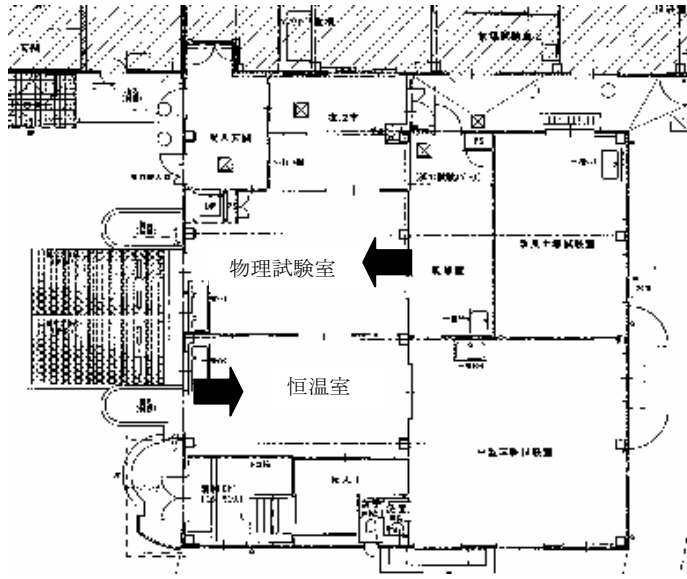


図-2(a) C棟 1階 平面図

C棟 1階の恒温室は粒度(沈降)用です。温度一定保持のため、南側の壁・窓ガラスには熱対策を施しております。



図-2(b) C棟 1階 物理試験室



図-2(c) C棟 1階 恒温室

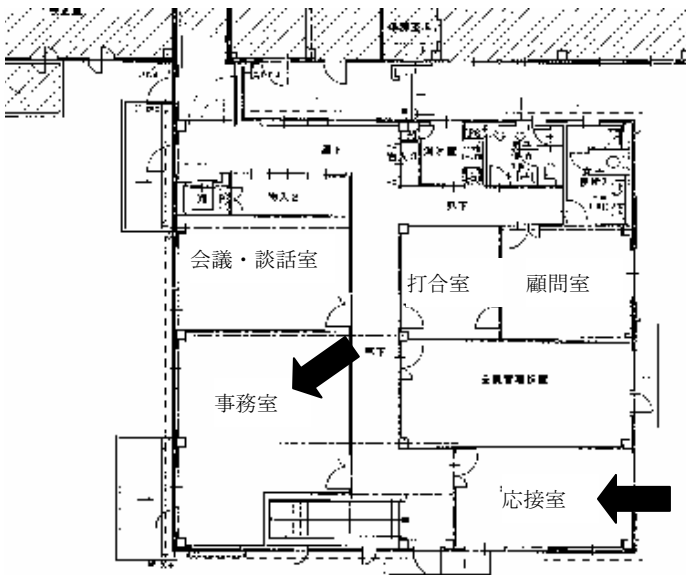


図-3(a) C棟 2階 平面図

C棟 2階には事務課、応接室、会議・談話室などを配置しました。



図-3(b) C棟 2階 事務室



図-3(c) C棟 2階 応接室

《試験立会・見学会報告》

当センターでは、発注者の試験立会をはじめ、顧客の要求に応えるべく各種試験の見学会を随時行っています。

下記の写真は最近行った国土交通省近畿地方整備局の見学風景です。

立会・見学が必要な時には、お気軽にお申し付け下さい。



国土交通省近畿地方整備局立会・見学風景 (平成 21 年 7 月 撮影)

国土交通省近畿地方整備局 来所記録

研修会・見学会等

年	月	部 署	目 的
2008	11	大和川河川事務所	土質試験の見学
2008	11	近畿地方整備局河川部河川工事課	河川部所内研修会
2008	10	近畿技術事務所	近畿地方整備局土質研修会の一環
2007	11	近畿地方整備局	液状化試験の見学
2007	8	近畿技術事務所	近畿地方整備局土質研修会の一環
2006	8	近畿技術事務所	近畿地方整備局土質研修会の一環
2005	8	近畿技術事務所	近畿地方整備局土質研修会の一環

土質試験立会等

年	月	部 署	目 的
2009	1	豊岡河川国道事務所	改良土立ち会い
2008	12	福知山河川国道事務所	改良土立ち会い
2008	8	神戸港湾空港技術調査事務所	土質試験立ち会い
2008	7	和歌山港湾事務所	土質試験立ち会い
2008	3	大阪港湾空港事務所	土質試験立ち会い
2007	11	豊岡河川国道事務所	改良土立ち会い
2007	10	福知山河川国道事務所	改良土立ち会い
2007	2	福知山河川国道事務所	改良土立ち会い
2005	11	舞鶴港湾事務所	改良土立ち会い
2005	9	大阪港湾空港事務所	定ヒズミ圧密立ち会い
2005	8	大阪港湾空港事務所	土質試験立ち会い
2004	6	大阪港湾空港事務所	土質試験立ち会い
2004	4	浪速国道事務所	改良土立ち会い



2009.07 和歌山港湾事務所



2008.3 大阪港湾空港事務所



2007.11 液状化試験見学

平成 21 年度特別技術講演会 開催報告

協同組合 関西地盤環境研究センター
所長 中山 義久

7月22日、ラマダホテル大阪にて参加者56名(組合員44名)を迎え、平成21年度特別技術講演会(支援サービス小委員会主催)を開催致しました。今回は今年の特別技術講演会参加者を対象に行われたアンケートで最も多くの要望を頂いた土壤汚染を取り上げ、「土壤汚染対策法改正による今後の地質調査業のありかた」というテーマで3名の講師からご講演を頂きました。

畑明^{はたあき}先生(論題：土壤汚染対策法の改正点と今後のありかた)からは、ご自身が関わった20数例の中から10数点について土壤汚染の種類と汚染規模を、その摘発から問題解決に至った経緯について内輪話を交え非常に丁寧に説明を頂きました。また、土壤汚染のみならず水質汚濁防止法以外の水汚染も多いとの報告がありました。これらの説明を踏まえ、今回の土壤汚染対策法改正のポイントについて、その背景と改正内容について説明がありました。



写真-1 熱心に聞き入る参加者

姜永根^{かんよんこん}先生(論題：土壤汚染対策とリスクコミュニケーション「略名；リスコミ」)は、リスコミが土壤汚染問題の解決に如何に重要であるかを歴史的な日本国家の成り立ちから説明して頂きました。地域住民との説明会では説明側の非言語コミュニケーション(服装・物腰・仕草など)が特に重視され、すべての人との対話の原点であることを強調されました。



写真-2 講演の様子(姜先生)

うえすなしょういち

上砂正一先生(論題: 土壤汚染調査における地質調査業者のあるべき方向を探る)

は、土壤汚染対策に関わる、調査機関の質的な問題について言及された。その中で地質汚染調査技術者に求められるものとして、汚染の原因究明・機構解析のみならず地質や地下構造を熟知し、さらに総合的に対応できるようなトレーニングが必要であると強調された。また、地下水汚染の事例で技術者の質が如何に重要で、問題解決にお金・時間のムダがないことを示された。最後に土壤汚染対策法の改正により、調査機会の増大、指定調査機関の淘汰、地質コンサルタントにとってビジネスチャンス再来と閉められた。



写真-3 質疑応答

講演会後の懇親会も時間いっぱいまで盛り上がり、有意義な一日であったと感じました。

平成21年度 技術者交流会

支援サービス小委員会では、下記のとおり、技術者交流会を開催致します。この交流会を通じて親交を深めていただき、組合員間のネットワークの一助になればと願っております。ご多忙とは存じますが、ふるって御参加頂きますようお願い申し上げます。

開催日：平成21年10月15日(木) 15:00~17:00

(17:00より親睦会を予定しております。)

開催場所：協同組合関西地盤環境研究センター 会議室(予定)

テーマ：もし明日から地質調査業界がなくなったら? ~ 自覚と将来へ ~

司会：鏡原 聖史氏(株式会社ダイヤコンサルタント)

C P D:2.0

[参加申込み先: TEL 06-6827-8833](tel:06-6827-8833) / [e-mail service@ks-dositu.or.jp](mailto:service@ks-dositu.or.jp) (楠本)

[参加申込み期限: 9月30日\(水\)](#)



地質調査業界は依然厳しい状況が続いています。このような中で個々のモチベーションを高く維持することが難しくなっていると思います。一方、本業界で活躍する人は、公共的な社会資本整備を担っており、非常に重要で責任ある仕事をしていますが、社会からはあまり認められていません。

そこで、もし明日から地質調査業界がなくなったら、どんな問題がおきるのか? など、若手・中堅技術者にフィクションを語っていただき、その中から本業界の重要性、責任の重大さ等を改めて考え、本業界内で活躍する人のモチベーションを高められる交流会にしたいと考えています。なお、技術者のみでなく本業界で働く方の目を通して同様なフィクションを語れる方、大歓迎します。是非、ご参加ください。

鏡原 聖史氏 プロフィール

昭和47年 香川県に生まれる
平成9年 株式会社ダイヤコンサルタント勤務
主に斜面防災に関する調査、設計を担当

当日は、自己紹介と話題提供(フィクション発表)を各自順番に実施していただき、最後に全体を通じたディスカッションをしたいと考えております。

簡単な自己紹介とテーマに対する考えをご準備ください。当日の説明ではパワーポイントを用いていただいても良いと考えております。また、準備の都合上10月8日(木)までにテーマに対する考え(箇条書きでも結構です)を支援サービス小委員会・楠本(service@ks-dositu.or.jp)まで送付してください。

第2回 ケータイフォトコンテスト テーマ“夏”

仕事場や旅先での一コマ、プライベートでの出来事、メッセージを伝えるワンショットなど、ケータイフォトに粋な題名を添えて応募してみませんか？

センターニュースでは、組合員の皆さんが携帯電話で撮影した写真を募集し、フォトコンテストを開催しております。

機材の性能や技術の差が出にくいケータイフォト限定なので、素人の方でも入選が狙えます。なお、入選者には豪華賞品？を用意していますので、奮ってご応募ください。

[応募方法]

携帯電話で撮影した写真データに下記の事項を必ず書き添えて、メール「E-mail : [jyoho@ks-dositu.or.jp](mailto: jyoho@ks-dositu.or.jp)」にてご送信ください（お一人様の作品は1点にてお願いします）。

- ① 題 名
- ② 撮影した組合員の会社名と所属
- ③ 撮影者氏名（ペンネーム可）
- ④ 連 絡 先



こちらの QR コードからも
申込できます

[〆切]

平成 21 年 8 月 10 日（月曜日）午後 5 時迄 です。

[注意事項]

ご応募頂いた写真は HP でも公開することがありますので予めご了承ください。また、人物・美術品・写真等、著作物もしくは肖像を作品に使用する場合は、予め著作者や被写体の方などから事前の使用許諾・認証を得た上でご応募ください。

編集後記

梅雨に入って、気温 30℃前後の蒸し蒸しした暑さにまいていたのも束の間、いきなり最高気温が 35℃を超える「猛暑日」が現れました。

気象庁の予報用語によると、日最高気温が 25℃以上で「夏日」、30℃以上で「真夏日」、35℃以上で「猛暑日」と定義しています。この「猛暑日」という言葉は2007年4月1日に行われた予報用語改正によって正式に定義づけされたそうです。

そういえば、私が子供のころ(1970年代)には「猛暑日」という言葉は無く、今よりもっと涼しい夏であったように思います。

そこで、地元の気温年別統計を調べてみると、日最高気温 35℃以上の日数が一桁であったものが、1994年を境に 10~30日と大幅に増えていました。もちろん、「夏日」も「真夏日」も一割増の日数となっていました。

これも、地球温暖化の影響であろうと思われませんが、このまま温暖化が進めば日最高気温 40℃以上の日を命名しなければならないのでしょうか。私は、「灼熱日」などどうかと思いますが、地球温暖化の影響は暑い夏どころではなく、もっと深刻です。「灼熱日」を命名するような未来にならないよう、現在の私たちが心がけていきたいと思います。

参考：気象庁ホームページ(<http://www.jma.go.jp/jma/index.html>)

(阪部 記)